

七月二十日午後六時三十分開會 於淺草北清島町統一閣
 七月二十二日午後六時 開會 於日本橋橋詰常盤木俱樂部
 七月二十一日午後六時 開會 於神田橋和強學堂

日蓮主義大講演會

講 師

日宗新報記者。法の響記者。統一記者。活宗教記者。
 大獅子吼記者。村雲婦人記者。布教記者。めぐみ記者。
 妙教記者。師子吼記者。(參聽無料)

主 催 在 京 聖祖門下雜誌社

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可(毎月一回)
 明治三十五年六月二十日發行第一號二百九號(十五回)

(東京 三協印刷株式會社印刷)

統一

第 二 百 九 號

修養上に於ける偉人の研究

權僧正 能仁 事一

國民教育及宗教に就て

海軍大佐 佐藤鐵太郎

信念の統一と發動

大僧正 本多日生

凡人と非凡人

文學士 小林一郎

各地活動史



一日 會講

日 時 場 師 仰 蓮

天晴會第三回夏期講習會

明治四十五年七月二十三日ヨリ二十九日迄
毎日午後七時ヨリ午後十時迄
東京市淺草區北清島町 統閣

(いろは順)

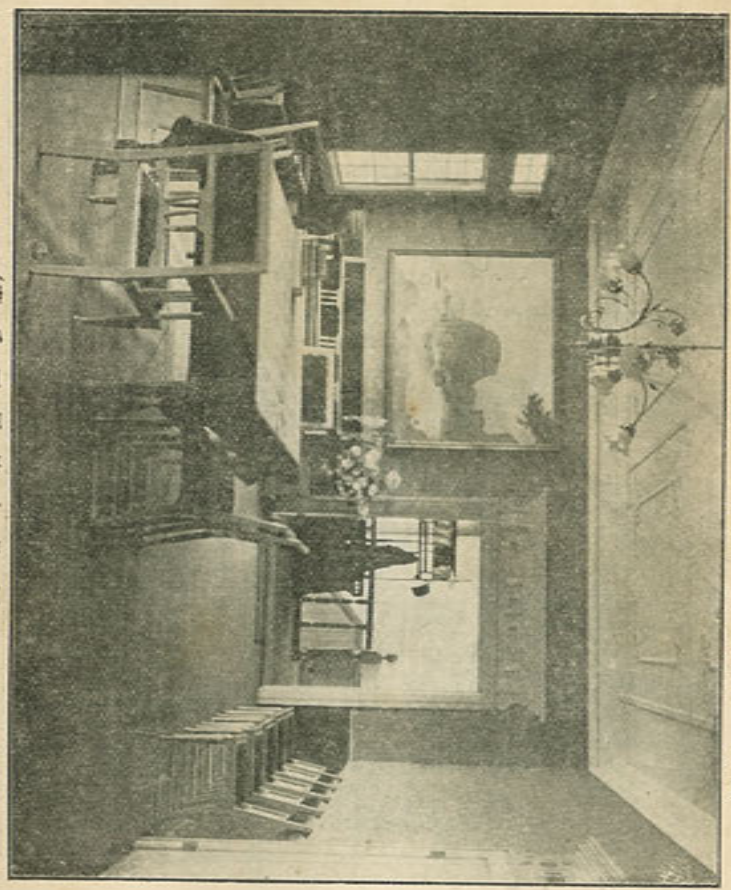
大僧正	僧正	權僧正	文學士	文學士	海軍大佐	文學博士	文學博士	唯一佛敎團長	金壹圓
本多堯日	脇田宣靈	武田成一	松林正成	小森一	幸田治行	姉崎太郎	佐藤太	三上參	三宅雄
清梁	山君	水君	清君	三君	三君	佐君	姉君	幸君	小君

會費 申送 事務 金便 法所 込費

日 時 場 師 仰 蓮 天 晴 會

金壹圓
出席聽講セント欲スルモノハ住所氏名ヲ明記シ會費ヲ添へ事務所ニ申出ラレタシ
本會夏期講習會事務所ヲ東京市淺草區北清島町十四番地統一閣内ニ置ク
會費ヲ送付セラルル際振替貯金ヲ利用セラルル方ハ「東京會社壹九番統一」宛拂込
相成リクシ振替貯金ニ依リ申込ノ際ハ拂込票裏面ニ講習會費ノ旨記入相成レハ申込
書送付ニ及ハズ

(若組之豆伊畫壁室接應上樓閣一統)



(攝馬丁原室小員會)

紀元千九百二十年。人皇九十代龜山天皇の御宇。弘長元年五月十二日。聖日遊。伊豆國伊東に流さる。當年。上人が如來使としての見地に立たれたまふて。一切の邪説なる人法を拆伏し。正令堂々論陣侃諤。宗教と政事の妄見邪想を叱咤すること鋭く。ために政府も僧侶も天下擧つて其偉力に畏れ。上人を如何にせばやと。前に申合せたる黨同は。遂に上人を伊東の島に流し給ふ。上人を載せたる舟はささみヶ浦の暗礁にして。名も恐しき廻岩に捨て去る。危かりし哉。時移り潮は滿て怒濤押しよせて御身を呑まんとする時。漁夫彌三郎。沖よりの歸るまを救ひ奉る。御歳四十。(三上生記)

下山抄に云く

國主の御用ひ無き法師なれば。設ひあやまちたりとも失に非ずとや思ひけん。念佛者並に檀那等又さるべき人々も同意しけるとぞ聞へし。夜中に日蓮が小菴に數千人押寄せて殺害せんとせしかども。如何したりけん其夜の害も脱れぬ。然れども心を合せたる事なれば寄せたる者は失なくして大事の政道を破れり。日蓮未だ生たるは不思議なりとて伊豆の國へ流しぬ。

信念の統一と發動

本多日生

本日は盛んに御來會下さいまして、此會堂を經營せるものにとつては無上の満足を得ます次第で、同人の深く感謝する所でありませぬ、又御來會諸君の中には遠國から態々御上京の方々も少からずお見受けいたしました、其御好意に對しましては此會堂を建設しました趣意に基いて、將來は誓て活動と奮闘との有らん限りを盡し、必ず初志を貫徹して御禮を申し上げる覺悟であります。

此會堂を統一閣と命名しました意は今更説明せずとも日蓮主義の何たるかを知つて居る人ならば、統一の二字が我主義の理想せる所のものであることは直ちに了解せらるゝであらうと思ひます、抑も私共の信奉して居る日蓮主義なるものは、一方には折伏の元氣を有し他面には包容の襟度と統一的中心を有せるものであります、然るに或るものは折伏の元氣に驅られて偏狹固

陋に陥りて包容の襟度を失ひ、また或る者は折伏の元氣を失つて法華骨なしの嘲笑に甘んじて居る、元來統一てふ文字の意は折伏と包容との二が車の兩輪の如く左右となつて活用せらるゝのでなければ、完全なる統一は期し得られない、統一とは單一と異なるのであつて、諸有ものを綜合し來つて其誤れるものは之を折伏し、而して其折伏は統一の爲めの折伏であるから、折伏して其邪惡の病毒を除き去りたる以上、他の長所は採つて以て同化し而して我ものとせねばならぬ、是れ即ち吾人が理想する所の統一であります。

主義既に此の如くならば之を奉ずる者の信仰も亦統一の信仰、即ち一面には折伏の元氣と他方には包容の襟度とを有たねばならぬ、然るに包容の極散漫不統一となり、徒らに襟度のみ廣くして弾力なきものは日蓮主義の信仰ではありませぬ、さればとて世に謂ゆるチャキの法華信者中に最も多き、彼の非常識なるもの、如きは却て宗祖を辱むるの甚だしき者でありませぬ、故に日蓮主義の理想たる統一の信仰の何物たるか

を本日此機會に於て説明することとは、尤も時宜に
適せることと思ひましたので、凭る演題を出して置いた
のであります。

宗教が世道人心を甚からず裨益することは言ふまでも
ありませんが、就中人心に歸結を與へ統一ある活動力
を得せしむるによつて、國民をして益健全ならしむる
ものである、故に何れの宗教にあつても信念の統一は
最も重要な調化の目的であらねばならぬ、であるか
ら之を説明するには各宗教に亘つて論じなければなり
ません、併し今日は時間もありませんから順を避けて
日蓮主義の信念の統一を述べやうと思ひます。

元來人間の精神といふものは散亂衝動して、ツケもな
いツマラナイ者が雜然として湧起し、甲乙丙丁と次ぎ
次ぎと續くものであつて、恰も猿が何の用事もなく枝
から枝へと上下して騒いで居るやうなものである、人
間は猿の飛び廻るのを見て嘲らつて居るけれども、
退いて自分の心を省みるとあなかに猿のみを笑ふこ
とは出来ない、茲に於てか人たるものは修養に修養を

とて、殆んど學問を排斥して山間に閑居し、そして坐
禪などを凝して精神を集中することに努めて居る、然
し此の如き方法は、社會の發達を抑制するのみで何等
益あるものでない、宗教の力は此繁雜なる社會に處す
るものをして邪道に迷ひ込ませぬやうに、精神集注の手
綱をひき締めて目的地に躍進し得る活動力を與ふるも
のでなくてはならぬので、之を避けしめるやうな不健
全なる考を起させては人を滅亡に導くより外はない、
馴馬を御することは易くして誰にも出来るが、悍馬を
御することは名手でなければ難いことで、佛を調御と
いふのは、能く悍馬の如き衆生を御し給ふからであつ
て今の世の人心は或る意味に於て暴馬の如きものであ
るから、手緩い御し方では到底駄目なので、能く之を
御し得て健全なる信念を把持せしむるものは、蓋し我
日蓮主義の特長であると吾人は確信して居る。

又ある宗教は感情にのみ訴へ且つ超倫理的にして宗教
に對する觀念は極普風であつて、用事が無いから寺へ
でも行かう位の信仰意識で、信仰は老人の閑事業、寺

積んで思想の統一を計るべき必要を感じなければなら
ない、統一とは時間の上からは生涯を通じて變移なき
を要し、昨日と今日と先月と今月と其考が違つて居
るやうでは、其思想は統一を缺いて居るのである、又空
間の上からいふと恰も猿の飛び廻る如くに思想の轉變
絶間なきは是れ亦不統一なるが爲めであり、
あるから茲に確乎不動の中心を撰び、餘他の雜想に侵
されぬ様にしてそして其自分の考へんとする中心點に
全精神を集注すること基を固むとさの如くならば、時
間の上にも空間の上からも思想の轉移を免かれて、よ
く統一を保ち中心を守つてゆくことが出来やうと思
ふ。

或るものは宗教信念の統一を計らんが爲めに、世の學
問をするものが多く信仰を滅失するのは、丁度人の十
八九才位までは催眠術にかゝり易く、二三十を過ぐる
に従つてかゝり難いのは、之れ其思慮が年をとると共
に複雑になるからであるが如く、學問をする程雜念や
疑惑のみ多くなる爲め信仰が次第に冷却するのである

院は一種の老人俱樂部の様に考へ、お墓行きの下稽古
をして居る、今も或る人が此會堂を見て謂つて居るこ
とには、こんな奇麗なお寺ならば早く死んで來たいも
のだ……と、異様に思ふ人もあらうが、寺へでも參詣
するやうな人には今もなほ左様いふ考へへの人が多いの
で決して珍らしくはない、僧侶にしても魂の抜けた仙
人の出來損いの様な顔つきをして居るから、朝早く電
車にでも、乗らうものなら、オヤお通夜の歸り、縁起
でもない、といふ様な顔付で俗人が坐を避ける有様で
ある、斯様な觀念を持たせるのは不可ではあるが、即
ち宗教は其様な社會の舞臺を退いたものゝ爲めではな
い、是れより社會に起つて大に活動しやうとするもの
に、光明を與へ力を授け方針を示すといふことが第一
の任務である、故に自然主義の小説も讀ませるかよし、
社會主義の書物を讀ませるのもよい、暴れるだけ暴れ
させて置いて最後適當な處でキユツと手綱を索き締めて
やるのが大切である、如此調御するには則ち強固なる
意志の力が要るので、悲哀極まる情の如きは此の場合

何の益にも立たぬ、されば宗教は須らく斯くあるべきものであつて、死んで行くものに統一を與へるなどは寧ろ可笑なことであるまいか。

此故に統一は如何なる理性にも活動にも進み行く勇氣あるものに向つて要するので、宗祖が理想せられたる獅子が千刃の谷に突き落しても尙且つ跳ね起さる様な子を育て上げる様にしなければならぬ、現代の如くに無暗に讀ませまい聞かせまいとする消極的方針は子の採らざる所であつて、見るなら見よ聞かぬなら何でも聞けと出来るだけ開放して自由を與へ、而して根本の手綱をひきしめて能く正道を歩ましむるものでなければ、眞の宗教の力とはいへないと思ふ、併し又此統一せられたる精神が余り締め過ぎて、一心専念が化して固陋願迷に陥り、恰も念佛の如く成る可く僅かの時間に可成多数に唱名しやうとして、たゞナンカン／＼とやるやうな弊を醸しても困りものである。

日蓮門下にも此弊を生じて恰も化石したやうな信仰状態も甚だ多い、何でも彼でも眠り乍らも南無妙法蓮華

近來散心に南無妙法蓮華經と唱へさへすれば、口丈けの統一が出来から心の統一は後にするといふやうなやり方をして居るものがあるか、聖人は之を警めて世間の人は口ばかり心ばかりは讀めども身に讀まずとまて仰せられたではないか、法然や親鸞がたゞナマイダ／＼とやる如く余り大安賣をするのは考へものである、聖人は一念の信あれば足ると謂はれたこともあるが、其一念の信とは統一的内含的の一念であることを忘れてはならぬ、太陽の光の如く大海の如く包容的の信仰にして、其内容には種々の活動力を有せる特性ある信仰である、こゝを以て宗祖は藥王品得意抄に於て、法華經の中心善量點を日に譬へ蓮門を月に法華以前の一代經を星に譬へ「夜星時月時衆務不作夜曉必作衆務」と決評された、即ち太陽の如き日蓮主義の信仰は發しては諸般の活動となるべき素因を包括せる統一的信念たることを知るべきである、尙本尊抄に「天晴地明、誦法華者可得世法一歎」と仰せられたのを拜しても益々其意義を明確にすることが出来る、日蓮主義

經と押し通すから、如何にも統一が出来て居るやうに見へるが、肝心必要の場合には少しも敏捷な働き振りが出来ない、一體眠るのと三昧とは大變な相違で、三昧は眠つて居るやうでも必要に應じては、釋尊のやうに梵音聲を發して忽ちに三千大千世界をも動し給ふやうな活らさのあるものである、宗祖の御信仰も、龍口の頭の坐にも驚きの色もなく、佐波雪中の四ヶ年の如きも其統一的御安心に於ては僅か一瞬間の如くに感じて居られたことと私は拜察する、これが常人ならば僅か一年間でもたゞ配慮の月を眺むるのみで何の爲す事もなければ幾萬邊欠伸をしたかもわからぬと思ふ、獨り聖人に在つては左様でないのみならず、必要に應じては開目抄や本尊抄其他御遺文中大篇の多くが、其御艱難中の大獅子吼たるに至つては實に驚歎せざるを得ないではありませぬか、是れ聖人が自らひき絞られた手綱によつて一瞬千里の大飛躍をされた吾人の好模範であつて、又信念の統一と發動との調和を事實に示されたものである。

の生命に實に茲に存することと信じて居ります。されば零碎單孤にして何等包容なき、貧弱なる信仰の如きは眞の日蓮主義的信仰ではなく、又現社會にも何等裨益を與ふるものでないから、從て衰滅するであらう否宰る私は其滅亡の一日も早からむことを切に祈ると同時に、また諸氏の囚はるゝことのないやうに望むものである、寔に宗祖の御信念の如きは、發して國家に對すれば滿腔愛國の丹心となり、忠君の精神と顯はれては至誠大義名分を明かにし、陪臣にして國旗を龍斷せる北條氏を痛撃し、隱岐法皇の陵下に泣き、社會に向つては愛愍の大慈悲一切衆生の諸の苦を受くるは日蓮一人の苦なりと感じ、親を思ひ師を敬ぶ報恩の玉情等、何人たりとも之を否むことは出来まい、而して其中心は五百塵點劫來十方佛土中二もなく亦三もなき法華一乘であつて、地球上の諸有の思想をこゝに總結し來つて、早く信仰の寸心を改めて實乘の一善に歸せよと立正安國論上に説破し、「天四海皆妙法に歸せよ日出て後星の光何かせんと獅子吼せられた。

又花鳥風月に無限の美を感じ、其生活に於てはあれ程の道境に處して大満足の法悦に住し玉ふたことは世人の夙に熟知せる所であり、其智は理性の高調を極め、三國の諸道を批判し盡し冠絶せる法華經を奉じ、徳はさすが法敵をすら拜服せしめられた位であります、之れ皆統一的信念より發したのであります、

されば吾々此芳流を汲めるものは、雜信亂想を斥け須らく此大信念を獲得せねばならぬ、日蓮主義に於て對境として安置する本尊の如きも、あらゆる神佛を奉請せる絶對的統一本尊であらから、之を信奉する吾人の信念も亦絶對的大信念を發揮して、模範的大活動をす

る所が其尊たる所でありませぬ。

元來精神修養の根本問題は、精神の統一に在ること古來動かすべからざる範疇であつて、劍道に於て一旦敵に向へば一分の隙も見せぬのは、精神を集注して眼さへまじろぎもしない如く、其他何事につけてもさうである、故に儒教の賢聖の道は一至誠以て之を貫くと教へる、是れ即ち發動性であるから、至誠の發動する所

國民教育及宗教に就て

佐藤 鐵 太郎

此前の天晴會の折、此次には何か御話しを致す様に矢野閣下より御注文が御座りましたが、どうも之と云ふ思ひつきもありませぬ大分閉口致したのであります、

が、何に致せ、先覺たり長者たる矢野閣下よりの嚴命には抗することが出来ませぬので、取り敢へず御承諾申上げた次第であります。

實は先般統一閣の開堂式の折、「自強將命と統一」と云ふ題を以て、世の中の教育家や學者の思想に就き私自身の了解し兼ねぬ點を申述べたのであります、

何となくまだ物足らぬ様に感じますので、矢野閣下の嚴命もありませんから、是を機會として更に同様の意味合を繰り返し、他の方面よりも觀察を下して見ようかと思ふのであります。

私は諸先生達の道德論を拜聴致しますると如何にも御尤もな事ばかりであります、どう云ふものかキビ

孝を思ひ、至誠道を愛し主國國を憂へ、奮然起つて東奔西走國の爲め道の爲め疾呼努力したものである、

んやまた至誠以て南無妙法蓮華經と唱へるものは、

としては居られぬ筈である、今や我帝國は正に國民的大自覺を喚起しつゝある千載一遇の好機連であるから、

學界の爲めにも道德界の爲めに將た國家の爲めにも日蓮主義の發揚には、本化上行の再誕日蓮上人の出世以來六百有余年の間、未曾有の機會を逸しないやう各人は大に努力しなければならぬ。

吾々同人は「異體同心なれば萬事成す同體異心なれば諸事かなふことなし」との聖訓を奉じ、邪教邪義を清掃して正義を語る日蓮主義的活動に於ては、他に一步も譲らざる考へで、從來の記録を破つて、天下の爲に微力を盡す考へであります。

した會心の處がない、丁度闇夜を過つて戸の外でマゴ／＼して御出でになる様な鹽梅で、モウ一尺計り進みさへすれば唐紙の引き手にとゞくのであるが、

ンの少し計りの處でマゴ／＼して煩悶して居らるる様に見へますので、斯う申しますと何となく自分計り偉褻様であります、

が、我々の居ります部屋には光明があります、勿論シートと席末の席末であります、

のであるが、若しも戸の外の方々が此部屋に御這入りになりさへすれば、直様シートと上席の方に御座りになるので身分に於ては到底較べものにはなりませぬ、

兎にも角にも座敷に這入りて居ります難有さは、戸の外にマゴ／＼して御出でになる御歴々の方々を御氣の毒に思ふのであります、

世の中の有名な教育家や哲學家や乃至亦宗教家が、御互に壘を高くし相對峙して居らるゝのは從來の行きが、り上無理もないのであります、

が、今少し相融和して居られたならば、而して亦虚心坦懷に明鏡の如き心を以て相對せられたならば、更に一段の進境に入られ茲に始めて道德と哲學と

宗教との大融合を認むると同時に、何の障害もなく我々の信する日蓮上人の室に入られて大歡喜を起さるゝのであらうと思ふのであります。

要するに、騒々擾々たる世の論者が、堂々と國民道德と宗教との關係を解説せられながら、我々共の如きつまらぬ思想家に笑はれたり、或は亦氣の毒に思はれたり致しまするのは、畢竟するに道德と哲學と宗教との大融合を意味する大教義に接せざるの致す所であると私は信するのであります。

私は皆様も御存じの如く、海軍に籍を置てありまする一軍人に過ぎませぬので、固より教育家でも學者でもなく又宗教家でもないのであります、従て教育のことと學問のことと宗教のことに就ては殆んど何事をも心得ぬのであります、之は寧ろ私の自分ながら幸福なりと信する所でありませぬので、この三ツの立場には全然超越したる位置に進むべき最も公平なる進路にあると思ふのであります、言葉を変えて云ふて見ますと、教育本位とか哲學本位とか或は亦宗教本位とか云ふも

跡がありません、而かも正々堂々と之を攻撃するのではなく、極めて不淡泊な有様に於て宗教心の撲滅を力めたのであるかの如く見へます、然るに此頃になりましては、教育萬能の先生や科學萬能の學者達と雖も、宗教の存在を認むると同時に有益なる活動を許さんとするに至つたのであります、従て政事家行政家が之を適當に取締り、從來に比して進歩したる有様に於て、其活動を促さんとするのを見て不精無精ながらも之に賛同するに至つたのであります、加之宗教は精神的事業でありますから、現今の如き物質主義の跋扈する時勢に於きましては、社會の人心に慰安の道を與ふるの必要があるのです、この意味合から宗教を督勵して健全なる思想を養はんとするに同意する學者も甚からぬ様に進んだのであります。

是は誠に慶すべき事でありませぬが、世の中の教育家や學者などはどうも薩張り從來の思想を棄て、極めて公平に宗教の何物たるかを觀察せないで、動もすれば、「喰はす嫌ひ」の様子を示すものがありますが、これ

のは、動もすれば途方もなき迷想到に人を導くのであります、この點より考へて見れば、教育家でも學者でも宗教家でもないと思ふことは、如何にも仕合せな立場にあると信するのであります、こう云ふ具合の感想を持って居りますので、今日は遠慮なく自分の思ふて居ります事を述べて、皆様方の御批判を願ふのであります、併し私の思ふて居ります事は、幼稚至極のものに相違ありませんから、中々之を公開すると云ふ勇氣を持ては居らぬのであります、幸ひこの會は水入らずの會で、講演する人も講演を聞て下さる方も、悉皆天晴會の方々でありますので、何の臆面もなく申上ることが出来るのでありますから臆面なく申上るのであります。

其處で愈々本論に這入るので御座りますが、事によると或は私の思ひ違へかも知れませんが、從來教育家や學者の方々は、宗教を見ること殆んど夫と孩の様に見へますので、一概に之を輕蔑して仕舞ふならばまだしも、殆んど仇敵の如くに之を迫害せんとしたる形はまだしも、宗教の本義をも會得せないので間違つて自分の宗教觀を土臺として論じ立つる方々も少なからぬ様に見へますので、三教會同後の論說などは大底此手合であると云ふても差支ない位であります。

或人は宗教と宗派とを混同し、或は宗教の精神と形式とを取り違ひ、學校に宗教を入るゝの不利を論ずるものもありません、之は固より論ずるを待たないので、學校の始まりに無上甚深微妙の法はと云ふて始めるべきでない、又決して南無妙法蓮華經とか南無阿彌陀佛とか云ふて科業を終るべきではない、併しながら宗教の本義、即ち人力以上に活動生面を開くべき心の力を養はんが爲に、宗教家と教育家と相提携して進むと云ふことは極めて必要である、人間以上の實在と其靈力とを信することは、日常茶飯事に類する道德には入用はないが、智究り術盡さるか、或は生死一瞬に決するが如き場合に於ては、學究的理論的教育に依て與へられたる智識のみを以て、之に應ずることは到底不可能であります、去りながら所謂教育家の心配するが如く、

宗教其ものが學校に於て行はるゝ徳育と道德上の主義を異にする様なことでは、到底學校教育と相提携すること能はざるは無論であります、この一點に就ては能く克く吟味する必要あります、之と同時に學校に於て説く所の道德なるものも、完全なる宗教に於て認むる所の道德と其主義根本を同ふして居らなければならぬので、道德の根本義は決して教育家のみに選擇の權を委すべきものでない、少なくとも教育本位の教育家に委任する譯には行かぬ、何うしても國體本位と人道本位との融合點に其主義根本を置かなければならぬが、又之と同時に宗教本位の宗教家にも委すること能はざるは無論であります、世の教育家たるものは能く克く此點に注意し、國民道德の「モーポリー」を以て自任するが如きことなく、先づ第一は如何なる宗教が國民道德と根本義を同ふするか、我國の國民道德は果して我國獨得のものであるか、我御國體は果して東洋の一隅にのみ存在すべきものであるか、之を「古今ニ通ラテ認ラズ」之を「中外ニ施シテ悖ラズ」と仰せられた

それも自説を確める爲の参考と云ふならば宜しいが、「オーソリティー」として他國人の言ふたことを信じ、一も二もなく夫を吹聴し自分の説も何にもなく、たゞたゞ學者らしく並べたてる人があります、こんな厄介な人は到底國民道德の本義などを論すべき資格がないのであります

原來宗教と云ふものは、神佛と人間との關係より生ずるもので、若しも人間以上の實在若くは人間以上の力を信ずることが出来ないならば、其人は到底宗教を解することが出来ないのであるが、人間以上の實在若くは力なるものは、現世を超越したもので、其本質は我々人間の認識以上のもので、學問の力を以ては解釋が出来ぬものであるので、要するに全然學術の範圍を超越したものでなければ、神佛ではないと云ふ様な思想を以ては到底神佛を解することが出来ない、人間以上の實在若くは力、則ち神佛若くは神力なるものは、現世現在を超越せるのみでは決して可けません、現世現在にも融合するものでなければならぬので、其究極

る如く、極めて普遍的であるので、其根本義に於て真正なる宗教と一致すべきこと無論であるが、果して我國民道德と融合一致すべき真正なる宗教が我國に存在して居らぬでありましょうか、之は是非其探究の上にも探究を加へ、若しもそう云ふものがあつたならば欣んで提携しようと思ふて一心になつて研究せなければならぬのである、自から教育家を標幟して居りながら、此の如き大切な意味合を悟らざるが如きは、決して教育家と稱すべき資格がないと評せられても致方がないと思は信するのであります、斯う云ふては濟まぬかも知れませぬが、世の教育家や學者は、誰がアー云ふた誰がコウ云ふたと云ふて、西洋の學者の申しました色々の事を引き出して教へて下さるのであります、日蓮上人も仰せられたる如く、彼の國に好かりし法なればとて必ず此國にも好いと云ふ譯には参りません、一寸近い話しが、我々は西洋人の鼻眼鏡をそのまゝに用ゆる譯には参らぬと同様、どうしても夫々改良を加へて適當のものにせなければ實用に適せぬのである、

に於てこそは學術の範圍を超越すること勿論ではあるが、又學術にもピツタリと融合するものでなければならぬので、幾何學に「アキヨム」がなければ如何に簡易なる問題と雖、到底解釋することが出来ないにも係はず、「アキヨム」それ自身は學術の範圍を超越し、如何にするもそれ以上を説明すること能はざるも、而かも能く學術と融合し立派なる數字となつて流通するが如き鹽梅であります。

然るに世人の或るものは、宗教的道德と人類の社會上の道德とを全然不同一のものとして速断して仕舞ひ、宗教的道德の内容は神佛の意思を基礎とするので、人間の認識以上のものであるから必ずして社會生活と合するものではない、従て場合に依ては社會道德を破ることがあるかも知れぬと云ふ學者もあるのであります、之は一應尤もな話しであります、成程不完全なる宗教に於てはこの傾向を認めざるを得ぬのであります、何百圓と云ふ大金を懐ろにしなから蕎麥の喰ひ逃げをやる、捕へて見れば之は阿彌陀様に差上る金であります

から一文も使ふ譯に參りませんと云ふてシャーン／＼して居るなどは、確かに社會道徳を破るもので疑もなく宗教の弊害であります。「法華を誦するものは世法を得べきか」と云ふのでなければ何うしても可けません、常陸の國から參つた老婆が五百圓の金を持って來て之を阿彌陀様に差上ると云ひますから、それは誠に殊勝なことであるが、途中で二百圓位無くなつて仕舞ふから止め方が宜かろうと云ふて或人が忠告を致しましたら、その老婆は訖驚してそんな悪い坊さんがあるなら持つて歸ると云ふから、早く歸つて何か爲になる様に使ふが宜しいと云ふて教へてやりましたら、老婆の曰ふにはいや／＼と云ふてありません、五百圓を阿彌陀様に差上げるのは一生の望みでありますから七百圓にして持つて來ますと云ふたさうであります、之などは前のに較べて見れば罪のない美しい話であります、宗教もこうなつては災でありますので、宗教に熱心なる人の態度が動もすれば世法に反し易いのは事實であります、其等は皆謬つた宗教の力でありますので、例へば謬り

と考へます、要するに宗教と云ふものは、日蓮上人も仰せられた如く、「抑も法華經を持つと申すは經は一なれども持つ事は時に随つて色々なるべし」とあります如く、又「適時而已」と天台大師が仰せられ、「取捨得宜不可一向」と章安大師が言はれたと、日蓮上人が仰せられたなども同様の意味でなければなりません、日蓮上人も「佛法を弘通し群生を利益せんには先づ時機時國教法流布の前後を辨ふべきものなり」と仰せられたる如く、決して固陋なる體度に依つて百事舊の如く行ふべきものでない、成立宗教と雖必ずしも萬代不變のものでない、成り立つては明瞭なことで、時々刻々向上して時勢に叶はなければならぬので、取捨宜しきを得るは實に宗教家其人の任であります、然るに世の學者其他教育家又は宗教家自身と雖、一種の固陋なる考から此間其筋で御催しになりました宗教者の會同に宗教の活動を求められたなども、依然舊き宗教の活動を意味するので宗教の向上を望み改良を計らんとするの意思毫もこれなしと速断するが如きは、誠に以て沙

たる哲學思想の人を謬り、悪い教育不完全なる教育或は又形式本位なる教育の人を謬ると同一であります、形式本位の宗教も勿論之と同様であります、果して宗教は悉く皆如斯ものでありましようか、立正安國王佛冥合知法思國を以て本義と立てたる宗教も、之と同じに世法を破り人類の道徳を害するでありましようか、設ひ地獄に墮て無量の苦を受くとも終に諸佛の正法を毀謗せずと決心せしむべき大教義は、果して世道人心を害すべきものでありましようか。

夫から亦世間の學者は、宗教を以て人格崇拜の意味ありとなすものもあるのであります、如何にも其通りであります、去りながら人格崇拜は必ずしも宗教ではありません、宗教なるもの、自然の影響として其宗祖を崇拜するのは無論であります、其本來としては寧ろ之に反對でありますので、法に依て人に依らぬのが本義であります、「法華經を口に誦し時に之を説く、例へば大蛇の珠を含み伊蘭より旃檀を生ずるが如し」と日蓮上人の仰せられたなども、蓋し此意味であらう

法の限りであらうと私は信するのであります、成程政府自身が關涉して教義の改良を迫るが如きことなきは無論であります、併しながら世道人心を正さんが爲には宗教も教育も自から奮發して改良せざるべからざるは無論のこと、教育のみは改良進歩するが、宗教は依然として舊の如くであるべきものと獨断するが如きは大膽なる獨断であります、而かも其甚しきは、我等國民に下された教育に關する勅語を以て教育家の専有の如くに考へ、宗教家之に預らずと考ふるが如きは潜越なる思想ではありますまいか、眞正なる宗教の本義が古今中外時として處として可ならざるなき大勅に一致すべきは勿論であります、世の教育家が御勅語の最初に「皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ルコト深厚ナリ」とありますのを、歴史的の叙事と拜するでありましようか、全然宗教的意義を含まぬものと考へらるゝでありましようか、果してさうでありましようか、ならば之は誠に嘆すべきことであります、御詔勅にありまします「徳ヲ樹ルコト深厚ナリ」と仰せられた徳の

一字は、教育家が普通云ふが如き道德の徳でありまし
 ようか、或は亦遙かに深遠に幽玄なる大俊徳大靈徳大
 神徳を意味するのではありませんまいか、私はこの教育
 の御勅語は宗教と國民道德とを融合し、且つ我御國體
 の眞意義を發揮せられ、我御國體の精華は麤て中外に
 施して世界人類の洪範となり、思想の統一を期せらる
 べき大宣言であると云ふことを信するのであります、
 若し中外に施すの意義を輕々に看過せらるゝが如きこ
 とあらば、之れ實に大勅を輕するの致す所誠に以て相
 濟まざる次第でありますので、我國家に特異なる天職
 ありて存するを悟らざるの愚者なりと謂はなければな
 りませぬ、殊に國民道德を教育家の一手販賣の如く心
 得る一派の先生達が、佛教家基督教家の或る人々が忠
 孝を説き國民道德を説くを見て、恰も自己の繩張りを
 犯さるゝ如くに心得、彼等の説は宗教の心髓より生ず
 るにあらすして迎合であると考へる人もあると云ふこ
 とであります、果して然らば之は甚して謬見であると
 謂はなければなりません、或る程宗教家中にも、自力

重ナラバ往生スベカラストコノ思ヒ共ニ甚ダ然ルベカ
 ラズ」と云ふが如き教義は、余程の説明を加へなけれ
 ば人間の道德と一致する譯には行かん、善を欲せず惡
 を恐れずと云ふことは到底道德と一致し得べき望がな
 いかも知れぬので、教育家が之に反對して攻撃するは
 尤な話であるが、之は決して佛教の本義であると云ふ
 事が出来ぬ、若しこの流の宗教が氣に入らなければ之
 を打破るが善いのである、此の如き宗派而かも一二の
 言を以て宗教の全部を否定するが如きは、例へば教育
 家の泰斗とも云はるゝ人が、自利主義を以て根本道德
 とするから教育も亦社會の道德を害するものと斷定す
 ると同一の筆法であること云ふ論法は到底健全なるも
 のと稱することが出来ない、教育家の間違つた考より、
 動もすれば大義名分の觀念を過らんとしたともある、
 以上教育獨り完全なりと稱することが出来ぬ、世間全
 般が物質的に流れ自前本位に走り道義の懷敗其の極に
 達せんとするが如きは、其責必ずして教育家にあらす
 と云ふことは出来ぬのである、私は潜越ながらも教育

を否定し純他方を説く一派の人は道德以上に慰安を求
 むるのでありますから、此一派の人を以て宗教全體を
 代表するものとせば、或は一派の教育家の考ふる如く
 宗教界の忠孝論は迎合であると謂ふても差支ないかも
 知れませんが、開目抄に「夫一切衆生ノ尊敬スベキモ
 ノ三アリ所謂主師親是ナリ」と仰せられたる日蓮上人
 の立てられたる宗教は決して然らざりませぬ「世ヲ
 安シ國ヲ安ズルチ忠トナシ孝トナス」とは上人の大理
 想でありますので、忠孝の二字が御國體の精華たるべ
 き資格を有するも之が爲めでありませぬ、「御宮仕ヲ法華
 經ト思召セ」と仰せられたる上人の御教訓は、決して
 宗教を離れたる御言葉ではありません、眞言の口傳抄
 に善惡二業の事として「上人仰ノタマハク菓ハ全ク善
 モホシカラヌ又惡モ恐レナシ善ノホシカラザル故ハ彌
 陀ノ本願ヲ信受スルニマサレル善ナキガ故ニ惡ノ恐レ
 ナキト云フハ彌陀ノ本願ヲ妨グル惡ナキガ故ニ然ルニ
 世ノ人皆謂ラク善根ヲ具シセズンハ譬ヒ念佛スト云フ
 トモ往生スベカラスト又例命念佛スト云フトモ惡業深

家の自省心に缺けて居るを嘆して居る一人でありま
 す、世の教育家が動もすれば宗教を以て超自然なりと
 速斷し、現世の活動を以て宗教の目的にあらすとなし、
 「現世に於ける人生相互の關係は道德教育にあらざれ
 ば改善し難きもの」と信するのであります、成程宗
 教の立場より自分を見れば、久遠の我が本體で、現世
 の我は僅に其應現である以上は、超自然の意義をも含
 むが如く見ゆるのは尤も至極な譯であります、現
 世と云ふも畢竟久遠世（之は一寸妙な言葉であります
 るが）の一部分であります以上は、久遠の我が現世の
 我と調和せざるが如き不合理なことはないのであります
 ので、宗教を以て現世の人生觀と一致せざるものと
 なすが如きは、畢竟宗教の意義を知らざるものと謂は
 なければなりません、未顯眞實の佛教は悉く皆時と場
 所と機根とにより方便を以て之を救ふので、つまりは
 一時投與すべき解熱劑や頓服藥の如きものであります
 る、以上は之を以て宗教の本義と心得る譯には參りま
 せぬが、若しも之等の意を悟り得たならば、宗教を以

て超自然のみとするが如き謬想に提はるゝが如きこと決してなからうと思ふのである、詳しくは存じませんが、基督教に「されど我汝に告げん惡に敵すること勿れ人汝の右の頬を打たば亦外の頬を廻して之に向けよ」と云ふが如き、又「爾曹の敵を愛し爾曹を咀ふものを祝し爾曹を憎むものを毒視し虐遇迫害するもの、爲に祈禱せよ如此するは天に在す爾曹の父の子とならんためなり」と云ふことは、如何にも尊敬すべき如く見ゆるが、之はどうしても超自然の思想に相違ないのであります、併し之れなどは如何にも美しう見ゆるには相違ありませんが、久遠の我より見れば決して賞すべき事ではない、決して中庸を得たる所置とは認めることが出来ませんので、一見自我の界を起脱するが如く見ゆる中にも自己本位の意味合を含んで居るので、自分さへよければ他人には過を再びさするも辭する所にあらずと云ふ意味合と、如此善行をなすも畢竟神の子となりたいためで、咀ふものを祝したり迫害者の爲に祈禱したりなんかするのは、唯だ〜自分が神の

成程我國の國家教育が宗教以外に立て居るのは事實であります、其内容に於ては決してそうではありません、動もすれば宗教を賤視し隱然兒童の思想を強迫して宗教に遠からしめんとしたのは事實でありますから、決して純然たる局外中立の態度を採つたものとは認められぬのであります、而かも自から放言して無關係の態度を採つたと云ふが如きは全體盡のよい話でありませぬ。

(六月八日開催の天晴會講演也。更に七月號に本論の續きを掲げ讀者諸賢の研鑽の資料に供すべし)

(三上生記)

子となるべき手段で、善を爲さんとする美しい心のみではないのであります、これは少し酷に過ぎた批評かも知れませんが、マーそう云ふた様な風であると云ふことは確かであるうと思はれます、乍併更に一步を進み、設ひ地獄に隨て無量の苦を受くとも終に諸佛の正法を毀謗せずとの域に至りますれば、全然人間の道徳と一致し何等の超自然の意味合をも含まぬのであります、世の教育家が宗教家を以て提携し難きものとして之を見るが如きは、畢竟宗教其物の本義を知らざるの致す所であると私は信するのであります、もしも世の教育家たるもの能く此點に注意したならば、宗教家の會同を以て教育家の關知する所にあらずとなすが如き不都合千萬なる思想を起すことはなからうと思ふのであります、如何せん、世の教育家は大概教育本位の思想に提はれて居りますので、一方に於ては國家を本位とする國民道徳を教育の本義と信しながらも、國家の休戚にも關すべき大切な問題に對し吾關せず焉の態度を採らんとするのである。

吹大法螺

聖祖門下在京
雜誌記者會

聖祖門下在京十社の同人は、各現在の所屬教團はちがつて居るが、何れも文書傳道と云へる文明的聖業に努力しつゝある熱血の志士であるから意氣衝天談論風發、一見善知の如く肝膽相照すと云ふありさまで、世の頑迷固陋の一輩が痛心するやうに、聊かも派別の念なくまた増味を築いて我を慕るが如きことはない、幾百年の間、互に臆怖神につかれて居つたため、運んで光風霽月の襟懷を披いて手を握るほどの勇氣がなかつたものと思はれる、一たび或る衝動により會同して見ると、いや何れも中々に開け切つたもので、所謂融合も開通も統一も、古い昔より解つて居たのであるから、議論はぬきにしてまづ色濃の妙行に勵まふじやないかと云ふまでに進む、議は即決せられて異體同心の聖訓を體讀するに到ると云ふ譯で、即ち本誌に紹介してある如く、東都の大舞臺において圓浮統一の大法螺を吹きあげるので、四方より雲集の善男女多かるべく、亦必ず「一定法華經ひろまりなんと覺へ候」との聖訓に副ふ所あると信する、

この會の例會は五月十五日午後四時より統一閣樓上に開いた、馳せ参じた同人は、大獅子吼記者、法警記者、日宗新報記者、村雲婦人記者、活宗報記者、布教記者、師子吼記者、統一記者(妙教とめぐみとの二社は不得已用務のため欠席)の八社における一騎當千の志士のみで、議論でも滑稽笑話でも思ふ存分に吐いて、そして卓上に選ばれた一人前山盛の馳走は、約束の第五項にある通り全部洗つた様に食ひ終る、いや面白い、この食ひ飲み且つ談するで、同人の融合の妙味を存する、而して是は我執小見に提はれて居る自稱先覺者には、之を味讀することは出来ない。(三上生)

修養上に於ける偉人の研究

能 仁 事 一

今回、北海道第七師團軍隊布教の爲め出張の途次、茲に一場の講話を爲すの光榮を得心中欣喜に堪へず、而かも、此修養につき物毎に考ひ其思想の熟せらるる方々に對しては、却て如何はしき感ありと雖、多少其参考たるべく、且一般之か研究上に資するものあらんを信じ本題を設けたり、而して今日は日蓮主義なる青森地明會の主催なるも、本題に付ては一般的に講話をなし、先づ修養上より説きて次に偉人の研究に及ぼさんとす。

凡そ國家の健全を期する上に於て、現代最要求せらるる傾向あるものは、自我の實顯、或は自我意思の廓清を期するとの觀念にして、要するに思想上の修養を積むことなり、即ち國家健全の發達を期せんとせば、須らく業務の奮勵に俟たざるべからず、業務の進捗は常に修養に頼るべく、即ち業に勉勵すると共に、一面教

意義を異にす、然らば如何にして修養を成就すべきか是れ吾人の研究すべき問題にして、釋迦牟尼の「修養の成否は人に問はんより己に問へ」との教に従ひ、自ら之を知るに至るまで、常に之が研鑽に努めざるべからず、而して其成否を見るに、先づ精神の修養成就せる人は、心平にして「能く寝むり能く醒む」、即ち眠覺意の如く、之に反し心中苦慮あるものは、常に夢安からざるなり、佛敎にも「惡夢を見るは心に足らざるものあるが故なり」と説かれたり、彼の孔子の如き其寢委常に眞々如たりしと謂ふ、修養の効身心晏如たるの狀窺ふべきなり、次に其顯出の關係につき一例を述べんに、修養は心の表裏の裏をとり表を顯はすものにして、偽惡醜は、世人の齊しく嫌忌する言動たりと雖も其表として顯出せしむべきものは、實に眞善美の三に外ならず、而し眞善美別に在るにあらず、偽惡醜の三を取除き破壊する其處に現るるなり、是れ即ち修養の效果にあらずして何ぞや、修養なる語を英語にて「カルテニューア」と云ひ、其調音「刈る取る」に通じ頗る

を尊び醇ふするの念慮なかるべからず、近時社會教育の漸次進歩したるは、蓋し此意味に於て然るを知るべき也、修養なる語の解釋は、古來種々に説明せられ、佛敎上に於ては修道修行或は修身等と説かれ、先哲は修養の義を修身養心と分解したり、大學にも身を修めんとせば先づ心を正ふせよと、即ち修身養心は是れ實に修養の基礎たるものなり、抑も此修養たるや、世上何人と雖齊しく之を必要とし、且日常練磨せざるべからざるものなりと雖も、若し之を打捨て置かば殆ど人たるの價值を認むべからざるに至るべし、學門と修養とは自ら區別あるものにして、藤田東湖の「讀書は多きを貴ぶも上二行は役に立たず候」と云へる如く、吾人は單に理窟や議論のみに捕はるること無く事を物々不絶修養を積み、以て日常生活の上に其効果の實現を期せざるべからず、修養の成否は、自ら容易に之を知るを得ざるものにして、如何に學才ありと雖も未だ以て完備せりと謂ふべからず、詔勅に「智能ヲ啓發シ徳器ヲ成就シ」とありて所謂徳性なるものは、學業と多少其

趣味を有す、卑近なる例なるも頭髮の蓬々たる庭園に於ける雜草の亂蔓せる、齊しく「刈り取り」によりて其品格幽雅を忍ばしめ、作物亦刈り取りによりて耕作を了るにあらずや、以て「刈り取り」の必要なる一端を窺ふに足らん、精神の修養は道德的の生活を爲すに至りて、初めて成就せるものと謂ふべく、而かも道德なる語は、世人舉げて之か解釋を試むと雖も、未だ其意義整ふたるものを見ず、釋迦牟尼の三慧經の中に、聞思修の三に分ち、就中修は即ち行にありと説かれたるが、其一句に曰く「以信爲道以制身口意爲徳」と、眞に間然する所なしと謂ふべし、即ち此敎による道德の内容は、内部より身の光を發するものにして、予は之を内光的と稱す、彼の道德性を存せざる所謂小人の光は、一時的の外面に附着したるものに過ぎざる爲、忽ち光りを失ふに至るべし、而かも現代の人多く信なきを以て、道德の發達亦容易に望むべからざる状態なるは豈に嘆すべきことならずや。

世上未だ宗教なるものを一種迷信的の意味に於て解

する者多し、是れ謬れるの甚しきものにして、苟も宗教を離れて、合理的進歩を爲し、建國の精神と皇祖大神を敬し、愛國の至情に充てる眞面目なる人を出すべきものにあらず、古來世に尊崇せられつつある偉人傑士は、常に宗教的に於て發達せるものたること事實既に之を證明せり、實に敬神と愛國とは國民道德の基礎にして、苟も宗教性を帯せる修養と道德と並進するに非ざれば、國家の發達人格の完成得て望むべからざるものと論斷するを憚らず、近時の學者宗教なる語を聖交と義解せり、即ち聖人と交るといふ意義にして、曩時教育政治宗教の三者合同の結果、健全なる宗教發達せる教育と相合して、所謂宗教的教育主義を採り、國民道德は一に宗教的道德たらしめんとする傾向を生ずるに至れるを以て、吾人は切に最完全なる宗教に頼りて、以て人格を涵養し國家を擁護せざるべからざるを信するものなり、而して前述せる身口意を制するを以て徳と爲すと、即ち身口意の三に亘る修養の關係を示せば

身に於て三の謹むべき重要事あり、即ち

盜、殺、不義（邪淫）

口に於て四即ち

惡口、兩舌、綺語、虛語

意に三の刈取るべきものあり

貪慾、嗔恚、愚痴

之なり、宜しく之を制し、刈取の修養を積み貪慾を轉じて慈善の心となし、嗔恚を變じて耐忍克己の心を養ひ、愚痴をして智慧の光を顯すことに努めざるべからず、其何れよりする修養も、敢て輕重あるにあらざると雖も、先づ其第一歩として口の修養、即ち言語を慎まざるべからず、日蓮上人の語に「惡く敬へば國亡ぶ」賞むれば功德を増す」と、眞に味ふべき言と謂ふべし、而かも言語は日常重大の關係を有し、處世上特に必要のことなるを以て、即刻より之が實行に努め、更に釋迦牟尼の「嗔恚を絶ては長壽を保つ」の教語を味讀せざるべからず、要するに如上精神と肉體との修養を望むものなりと雖も、須らく其低き所近き處より歩を進めよ

且其修養に當りては常に偉人の言動に接觸し、以て其研讀に努めざるべからず、或人の句に「足跡を辿れば易し雪の道」と云へる如く、偉人の踏初めし足跡を追ひて進めば始めて、力ある人と爲り得べきなり、實に修養に於ける偉人の力は、人格の完成と向上とに於て離るべからざるものと云ふべし、然らば偉人とは何んぞや、是當に研究すべき最大の要事たり、近事の學者、偉人てふことに定義して曰く、智情意の尤も完全に發達し、殊に意志力の強大に發達したるものなりと、即ち得意にも浮ばず失意にも沈まず、一身を國家に捧げ人世に光を與ふる、所謂内光的人たらざるべからず、得意に注意を拂ひ失意には却つて之を利用し、猛然として所信を貫く人たらざるべからず、然れども此偉人も常に正しき信仰に住し、其顯れとして敬神の觀念と愛國の思想豊富たるべきを要す、吾人は此好適の偉人として七百年の昔、日本國は東海の濱に漁父の子として生れたる偉人日蓮を推獎するに最も全力を致さんとす、上人が得意の時には益々之を利用して猛然發進

せられたる、千山前に横はるあるも屈せず、萬浪押寄せ來るも平然として所信を任せ、一難來る毎に勇氣百倍し、道の爲め國の爲め丹心を吐露したる天下殆んど等倫を見ず、陪臣北條の三帝二王子を遷し奉りたる承久の暴逆無道を見ては、大義地に墮ち名分の廢れたるを慨し、立正安國の大義を標榜して膽喪の如しと誦はしめたる義時の暴戾を警め、又

日本の武士の中に源平二家と申して王の門守の大二匹候

と豪語し、森烈嚴正なる大義名分上の主張を旺盛にして、其當時の學者宗教家政治家等、皆獨り北條あるを知つて皇室あるを忘れ、名聞利養の狗となつて北條一門に阿附追從する、所謂惡亂離の世の中に上人獨り皇室の式微と佛法の亂れたるを慨し、敬神愛國の至誠抑へ難く、怖れず憚らず侃々諤々の論議を鳴らされたのである、當時上人が大義名分勤王の赤誠は、遂に建武中興の基を爲し、楠公父子新田義貞准后親房を出し、近くは水戸光國の勤王家を續出したるは、實に上人首唱

の感化に出て、日蓮主義勤王の大義の顯現である、是近世史實の明かに論證するところ、彼の後醍醐天皇の左に法華經を握り右に寶劍を按して吉野の行宮に崩御あらせられたる、又越前福井市の藤島神社の神體として奉安せる忠臣新田義貞の兜の中には

如來秘密神通之力

なる法華經壽量品の要文を自書安置しある等、如何に日蓮主義と勤王との關係、深く法華經主義と愛國の思想との實現を推知すべきなり、彼基督の十字架上當に一槍の下に斃れんとするや

あゝ我か神我か神何ぞ我を捨て玉ふや

と云へり、嗚呼何等の泣言ぞや、吾日蓮上人が北條の忌諱に解れ、相州龍の口の巨厄に危く刑場の露と消えんとするや、門弟抑へんとして抑ゆる能はず、唯今なりと泣く此時上人聲を勵まして曰く

不覺の殿原かな是程の悦をは笑へよかし如何に約束をば違ひ玉ふぞ

と警め

のなること論を俟たざるべし、其他吾佛教諸宗の中にも、大日彌陀藥師觀世音等雜多の佛菩薩を安置し本尊として居るも、一の天照大神を本尊とし敬神愛國の至情を吐露しあるものを見ず、獨り吾日蓮上人は、七百年の昔に於て自ら日本の柱として奠定せられたる十界圓具の大本尊中、天照大神を勸請せられたる誠意、儘に古今獨歩の敬神愛國の勤王家なりと論斷するを憚らざるなり、如斯日蓮の修養も、上に偉大なる法華經統一主義の正しき大信念より涌き出でたる結果なるを想はざるべからず。

以上は日蓮上人の偉の一端を紹介したるに過ぎざるが、尙各方面に亘り大に吾人修養の模範となるべき點多し、吾人修養に於て偉人の力の如何に強大なるかを想到らば、諸君益偉人の芳躰を尋ね、修養の効を積み道德的生活の實蹟に努められことを至囑して已まざる也。(明治四十五年五月三十一日青森大林區署に於ける講演の大要にして文責素より筆記者にあり、青森米峯生記)

幸なるかな法華經のために身を捨てんことよ臭き頭を刎ねられんは砂に金を替へ石に珠をあきなへるが如し

と言はれて居る、何んと痛激の言にあらざるや、是白刃の下に坐し玉へる人の言として云へ得べきか、之を彼基督最後の泣言と相對し果して如何の感がある、又敬神の念に於て古今獨歩の見を有せり、近時「ハイカラ」の人士、稍もすれば、國家主義を以て偏狹なりとし、世界主義に心醉せんとする傾向あり、蓋し想はざるの甚たしきものなり、予は斷言す、世界主義にして眞理なりとせば國家主義亦眞理なりと、苟も吾人自らの立場を糾明せずして徒らに想を悠遠に走らす、危険是より發すべし、殊に日東帝國民は、須らく國祖天照大神を敬ふに於て最も其重を爲さざるべからず、之を現在の諸宗教に徴するに基督教は唯一神觀を堅く探つて、他一切の神を穢の神とし、畏くも國祖天照大神迄も、其中に包含せしめ尊敬の念を斷たしむ、如何に事實を責むてふ附焼及の辨護を弄するも、我國體を傷くるも

凡人と非凡人

小林 一郎

私は統一閣に參つたのは二度目でありすが、御講演をなさる方々とは久しい以前より知己の間柄であつてこゝに出てお話しするのは私にとつて最も愉快に感ずる所でありますから、何か有益なお話を致したいのです。近頃別に取調べた事もなく又思ひつきもありませんで、曾て考へましたことをお話しやうと存じます。凡人とは平凡なる人即ち普通の人、非凡人とは平凡でない即ち普通以上の人をいふのであつて、今日は如何なる人が凡人で如何なる人が非凡人であるかを説明しやうと思ふのです、併し歌詠でなければ歌を眞に解釋し又批評することの出来ぬやうに、平々凡々たる私がよく非凡人を解してお話し得るか否かは甚だ疑問でありますから、至つて不安心な問題であります。さて誰でもお前は凡人だと言はれたら良い心持はしない、けれども自分の凡人たるは事實であつて、大概の

人は自分は非凡であるとの條件は出し得ないから、其の醜憤をば普通は自分より以下の凡人を考案出して慰めて居る、貴女は美人でないと云はれて腹の立つた時は於以下の醜女を探すより外に慰め方のないのと同じである、私の近所に餘り美しく無い娘があつて人が好く云はない時は、それでも彼の女に比べたら……といつて同町内の髪の毛の赤い女などを引き合ひに出しますであるから其家へ来る人は他家の人を賞めたことがない他家の女を賞めれば自分の家の女を悪く云はれるやうに思ふからであります、故に平凡な人の所では必ず他の悪い話が話に出る、其は氣に入られやうとするからである、此はお互に注意すべき事で、自分が美くなる程善い話を聞くやうになるものです、これは其話される偉らい人と自分と較べても自分が其人より見劣りのする心配もなく、随つて嫉妬も起らないからして、人の悪點を見出す必要がないからである、故にお互が自分の家の事を考へた時、人が来て第三者の善い事を話して呉れる程其丈け自分の家がよいのであります、學生

又偉い人のことを見た時は何となくイマ／＼しいやうな感觸が捨て、終ふが、悪いことには熱心に注意する、現代の學生が墮落したと云ふことが盛んに論じられたことがあつたが、實際は其れ程多くの者が墮落しては居ないので、其を氣をつける人が多くなつたのだと思ふ、果して然らば一層憂ふべき現象であつて、又心配される學生よりも心配する世人の方が餘程危なくはないかと思ひます、されば人は成るべく不愉快な事は聞かないやうに、成るべく清らかな良い方へ目を注ぐやうにすることが尤も必要であつて、各自の家庭に於てもかゝる方法を實行してゆかぬと、社會政策も到底無駄なことであると信じます。

誰しも凡人たることは望む所ではないが、併し非凡なる人は澤山に出るものでない、故に成るべく悪いことは見るなど注文しても逆も實行はし難い、出来難いのはウツカリして居ると自分が危いからそんなことをして居られないのである、であるが今いつた注文をするに、はも少し考へを進めて置かねばならぬ、それには先づ

にしても自分の點數の悪いもの程他生の點數を氣にかけて、併し誰某は落第點が幾何あるから未だ僕のは、など、いつて自ら慰めて居る、だから成績の悪い者はと同級の穴をよう知つて居る。

今世間で新聞などで書き立てられ嫌はたてられて居る事柄の多くは悪い事か善い事か、又お互が氣をつけて讀む事件は悪いことが多いか善いことが多いか、自分は世間では餘り好い話には氣を付けて居ない様に思ふ、善い事件は新聞にも五號活字か中には六號位のもあるが、悪い事件だと二號位の見出しで書き立て居る、又讀む方も孝子の話などは讀みもしないが、悪い事だとイヤ五人殺しの犯人は今日は如何なつたらう、イヤ心中の對手は如何したのと新聞の來るのを待ち兼ねて大騒ぎやつて居る、怒る時代は決して感服すべき時代ではない、これは自己が平凡であつて何等誇るべき事が無い爲めに、何處か自分より悪い奴はなからうかと探すから新聞の三面を喜ぶやうになるのであると思ひます。

自己の生活を平凡でないと考へる様にすることが必要である、今少しそれに就て話しませう。

諸君の中には今日の世の中は昔より苦しくなつたか否かに就て考へない人はありますまい、而して將來は面白くなつて行くか苦しくなつて行くかに就て諸君は如何に考へられますか、何となくツマラナク何だか苦しくなつて行くやうに思ふ人が多からうと思ひます、中には左様感じない人もあらうが恐らくは少數であらう私も何だか苦しくなるやうに思はれます、今日も電車の中で乗つて居る人々の目付が近頃段々と凄くなつて來たやうに感じまして……さう思つて見る私の目をこそ人々は何か鬚武者が變な目付で見て居るワイと思つたかも知れぬが……ウツカリしてると蹴飛ばされやしないかと思はれる程に見えましたが、其は恐らく世人に長閑な心が無くなつた結果でありませう、人を見れば盗人と思へといふ古諺を事實目付で表現して來たのだらうと思ひます。又貧者は益不愉快になる、世の中が競争が激しくなれば勝敗が多くなり貧富の懸隔が

甚だしくなるから、敗者が勝つた者と顔を合はすと、うも面白くない、反之世の中が穏やかだと甚だしい。テメが餘り目立たないから上下とも愉快である、さればといつて勝つたものは如何かを見ると此も亦面白くない、人は可笑しなもので一人が讚めて呉れると心配になる、即ち右の人が讚めて呉れると左の人は思つて居るだらうかと氣にかゝるものです、故に讚められる人も益々心配が増して来て、世に名が顯はれて人の評判が多くなり、世間の地位が高くなる程心配も多くなる、私は曾て逗子へよく行きましたが避暑客の多い處で貴婦人なども随分往つて居まして、其等の人々はたとへ知らない人でも行き違ふ人毎に多大の注意をします、そは其人達は常に上流にあつて人から注目もされ幾分か讚められることも多い人であるから、見ず知らずのものでも人が通ると彼の人は自分を何と思つて居るであらうか、毀しりはずまいか、此指輪を何れ程に見て居るのだらうかなど、心配しながらチロリ／＼と見て行く、指輪などの無いものは却て安心です、其程

で居るのであるから何も邪魔する程嫌むことはないのであるが、理屈はさうだが自分は雨にうたれてシヨボ／＼歸つて来る所を、此處二階ではさも面白さうに遊んで居るのを見ると、人情何となく邪魔でもして見たくなるものであつて、恚る精神が體では社會主義ともなるのでありませう。

斯様な次第であるから世の中は漸々面白くなくなる、殆度小言をいふ人も言はれる人も共に面白くないが、さればと言はずにも居れないのと同じやうな譯であります、又船が何十艘と列んで沖へ出て急に天候險惡となつた時、列を正して歸るとは出来ない、他の速力を考へて居るより一時も早く歸つて來ねばならぬと同じく世の人は他人の事など考へて居ては自分が立たなくなる、故に別々各々になつて終う、徳川時代には三十才の人と四十才の人とでも左程考の異ふものではなかつたさうだが、今日では年が異へば皆異ふて各自自分の考へた方へと計り進んで行く、其れでなければ自分が危ないからである、故に歳が異ふとお互に了解し

心配になる指輪でもさればとて捨てる譯にもゆかぬ、結局其心配を慰める爲めに自分は偉いものだと思つて僅かに慰める、隨て二百圓のものを三百圓にも見せたくなつて益々心配がふへる、一人の下女を使ふ人は二人にも三人にも見せかけたい、よくやるのですが今日は生憎一人の方の下女を使ひ出したので、といふが固より一人しか居ないので使ひ出したとは眞赤の嘘だつたりする。

であるから地位の高い人も世の中が益々苦くなる様に感ぜられる、況んや卑い人は猶更高い人を見ても僻む様にもなる、僻んだ所で實に益に立つとでもないが、道を歩いて自動車が大路を我物がほに行く人々を追退けて喚い煙を残して行くと私共も一寸癪に障る、對手は自分の費用で乗り廻すのであるけれども其處が何となく人情の然らしむる處である、麹町の富士見樓へ往つた時に、折角の二階の窓に目隠しがしてあるから何故かと聞いて見ると、外から邪魔をして石などを投るものが時にあるからださうで、人が自分の金で遊ん

合はない、姉と家との如く一方は強情だと語り一方は頑固だと嘲る、併し一人一人は良い人であつたりするのが多い、斯る次第であるから皆家庭に満足して居るやうな顔はして居るが、其實御世辭を抜きにして露骨に言はせたら満足して居るものは甚だ少ない、夫婦間ですら互に不満足に思つて居るものが年と共に殖えるやうに思ひます、右様な事は此の如き時代に當然でありまして、夕立の時に共に手をとつて駆け出して逃げ

て居ては共にビシヨぬれになつて終ふと同じでありませう、家族中でも甲と乙と各自の考へがあつて、心の安らかなのは寢て居る時だけである、寢て居る時までも晝間演じた喧嘩の夢を見る位である、で此考が各自目付に表はれて電車の中の人の如く眼ばかりキツクなるのであらう、此やうにイラ／＼した心の人々が相交はるから互に慘酷ともなり何でも無いものを敵ともするやうになつて、凡て人は文句を言ふ爲めに此世に出て來たやうで、日々夜々氣に入る氣に入らぬイヤ怪しかる怪しからぬといひつゝ一生を了る、此れでは到底極

樂などへ往けさうにもありません、お互に今此ま、死んだとして果して極樂へ往けるやうな心持は致すでしやうか、寧ろ地獄の方が必然だと思はれるでせう。さて此の如き世を如此ツマラナイと思つて過すべきであらうか、たゞしは左程に思はないで過すべきか如何か、お世辭なしで言へば今日の會衆中の皆が實際に有り難くて来て居るでせうか、私は先づ有り難さうだから來てる人も多からうと思ふ、其人々は前に述べた傾向が激しいから此間へ來れば有り難い話も聞けるだらうと思つて來てるのであつて、却て宗教的會合に集まる人は危ない人計りで、大に自ら用心すべき人々であります、これは人々が大に考へねばならぬとて、平凡でも世を平氣で過す間は危くないが、併し如何にかなるまいかと思ふやうになつたら危い、即ちさう考へる結果今に何事をやり出すか解らないからで、良い方へ向へばよいが悪い方へ向ふと危い、されば現代では男より女の方が危ないのであつて、女は途方もない事を目論で居る、働かないでマイヤの指輪でも欲め機嫌をと

何日ぞや、私は案内されて文藝協會の劇を見たが、一人の婦人が夫をも家をも嫌らうやうになつた筋であつて政府は終に之を禁じました、併し如此劇が若き男女等に歡迎されるやうになつたのは何故か、私の考へる所では、在來根本の謬想として顯はれた、即ち表向の仕事と、隠れたる即ち内面の仕事とによつて其人の價値に上下を定めたことであつて、即ち顯はれた人は貴く、蔭の人は卑しいものと、考が世を誤つたので、終に女子に謀叛を起させるに至つた、然るに人は其謀叛を悪むけれども其實惡む資格は無い筈である、自分等が謀叛するやうに仕向けたのであるから、又全くの日蔭者に仕て終はれて謀叛を起さないものは馬鹿である、併し私は今直ちに謀叛せよと云ふのではないので、これは謀叛をムヤミに惡む人に注意をしたまでである。全體人の事業は目前の事のみで其價値を決定すべきものでない、世の中に一時は歓迎されても十年二十年の間は葬り去られたものは幾程あるか知れぬ、實際の價値が仕事で永遠に生命があるか否かに依て定まるもの

らせて天國へ行かうなど、理想してゐるのは現代の女でありまして男ではありません、斯ういふ風な謀叛を女子が多く懐くやうになつたのは古來永い間婦人を卑しい日蔭者として黙らして置いたのが、今日になつて突發して來たので全く男子の罪であつた、女子にも今少し考を持たすべきもので今日反動的に出て來たのも無理はない、これは實に一家庭や一國の問題にあらすして世界の問題であるから大に考慮を要するところである、そこで今日では追々女子の地位を認めて來て、然らば兎も角學校へでもやらうとなると、此度は價値を考へ損なつて、イヤ同權だとか何だとかと男子を臂に敷く今迄婦人を日蔭者として引き込ませて置いたのは男子が悪るかつたのであるが、併し又女子の知識も低くかつたので男子計りの罪でも無い、又男女は何日まで經つても同方面の仕事をするものでなく、表に立つものゝ裡に居て土臺となるものとなければならぬ、であるからこれは世の人が内外両面の仕事を同價値として見て行くやうになれば自然に解決せらるることと思ふ、

で、一時現はれたか否かに依るものではない、而してこの永遠に残る生命ある仕事を爲したものが即ち非凡人であります、で此仕事の表面には必ず隠れたる土臺ともなるべき仕事がある、それを知らなかつたのが今までの誤であります、多くの人は家の柱を見て土臺を見ないが、家が崩れて家土臺がしつかりして居たか居らなかつたかが始めて氣付くものである、先年九州で唐富樓の跡を見ましたが、今は家も柱も無く土臺計り残つて居るが、其土臺丈けを見ても當時は凌雲の大樓閣であつて如何に立派であつたかを忍ばしめる、されば今日の仕事も土に埋もれた土臺の石になつたもの、方が後世に知らるるものと覺らねばならぬ、大凡人が働くには其後に黒幕があつてよく彼をして働かせるといふことを知らねばならぬ、黙つて蔭で働いて黙つて死んだ無名の英雄の上に眞の事業を見ることが出来るのであります、維新の大業と雖も南州翁の後には今に名の知られぬ人があつて援けて居たので、其人々を土臺として其上に働いた人々が今日の元老である。

凡そ人の見る處では活動するが隠れたる晴れ／＼しく
ない處では働かないもの計りであつたら其國は滅びる
より仕方がない、然らば現代は如何、今日の我國の根
本問題は此の點だと思ふ、それには朽ちない事業をし
たのが非凡人で、否らざるものは凡人であるといふ分
域を明かにして置かねばならぬ、今然らば如何にせば
不朽の仕事が出来るだらうか、不朽の仕事には必ず隠
れたる土臺となるべき者が要る、外交や戦争の裏面に
は商家も百姓も要る、又着物を縫ひ食物を調理する婦
人もなくてはならない、其を何だ馬鹿々々しい衣類を
縫つても直ぐ擦り切れて終ふとやないか、などといつ
て縫はなかつたら働くものが外に出ることも出来な
い、故に見はれて働くものと同じ價值のあるものだが
併し隠れて働くのは何となく馬鹿々々しいやうな氣が
する、宗教信念の必要は蓋し此處に存すると私は信じ
て居るのであります。

此世の中の事を此世の間で判断をつけやうとするのが
抑もの間違で、此世に居る間に自分に正當の批評を加
へない、大臣でも馬丁でも女でも男でも唯一の誠によ
つて成佛の出来るものであるとすれば無限の妙味もあ
り、又仕事の分量は少くとも人を佛の國に導びく力は
大なるものである、今日の學校の修身書には祖税を滯
つてはならぬと教へてあるが、其様な枝葉の事は教へ
なくとも、汝等には佛の性あり誠によつて自他共に成
佛し得るといふと教へて置けば充分で、何れにも應
用が出来る根本の觀念であると思ふ、學校で料理など
は教へて呉れずとも物事は心切たれとさへ教へて置け
ば立派に料理は出来るもので、何事も其通りである。

現代のやうな世には心の基に一の大信念を養つて、此
世以外の處に力を得て悦びを見出すより外に道はない
然かすれば則ち自ら非凡人とならうと思はないでも、
自然に非凡となり得る、即ち其信念によつて働かさへ
すれば充分であると思ひます、

以上述べました事は實際お互に出来るだけ氣を注げ、
又人にも氣を注げさせるとが大切でありまして、お互

へて呉れる者はあるものでない、今日賞めて呉れた人
も明日になれば早や自分を忘れて居る、故に周囲の批
評に生きて居るものは平凡極まる、現代の批評は如此
便りないものであるから、其處に人生以上の意義を見
出さねばなるまい、人生以上の意味とは、自分のやうな
微力薄徳の者に佛になる性質があると自覺することと
ある、此自覺がなければ、便りなくつて活きて居る氣
もしない、けれども人にして此自覺だにあれば、雑巾
を刺し食事の準備をして居るのは小さな仕事のやうで
あるが、真心をもつてやつた仕事はやがて自分も成佛
し、又他人をも成佛せしめ得る、此考で雑巾を縫ひ食
事の仕度をすればそれが、雖て不朽の事業ともなる、
故に此誠意を以て雑巾を作るか否かによつて凡人非凡
人の域も分れることになる。

平將門は謀叛人であるともないともいひ、石田三成に
しても奸物であるとも忠臣であるともいつて、今に批
評は定まつて居ない有様であるから、世の批評のみに
活きてるのは實にウラヌとである、人は回りが合せで金
比之に依つてまた自分の考を果敢して各自に修養いた
したいと思ひます。

日蓮上人云く

設ひいかなるわづらはしき事ありとも、
夢になして、只法華經の事のみさばく
り(思索) 給ふべし、(續遺文千四百四十四頁)

法 鼓

統一閣に於ける講演會

今の時代の欲求に應じて慰安と自覺を興へ向上と満足と各方面の日蓮主義が隆々衡天の勢を以て勃興し活方面有識者間に讃仰せられ善男女は愈々堅き信仰を把りて勤くおやがれきげに欣ぶべき事である六月十六日午後一時より妙教婦人會の例會を開いたが聴衆三百餘本多大前正首導の下に莊嚴なる法會を行ひ吉永義彦師は人と題して人の價值を論じ其履むべき道を説いて日蓮主義に入るべきを誨へ小林文學士は本誌に掲載せる如く凡人と非凡人とに就て詳々切々能く聽衆の肺腑を衝き本多大前正は萬人の幸福と云へる諸題にて人生の裏面を概観し去り各宗教の根本思想を解剖し究明せる教にあらざるを斷定し日蓮主義の特色を説いて萬人齊し享すべき幸福なるを懇諭せられたので散會を告げても聴衆は何となく歸るを忘るゝやうで如何にも感に打れたと云ふ態度が見へた次に開いた講演會夫は久しく振はなかつた青年會でこゝ新生面を開いて大に特色を發揮すべく六月二十三日午後一時三十分より講演會を開いた係員の準備廣告行届いて各方面に知れ渡したので定刻には三百五十餘名の熱誠なる求道者は極めて慎重な態度にて控へて居る三上本誌記者は「修養と日蓮上人」と題し輕快流麗の詩論を以て修養の意義を説き更に釋じて現代人の修養とし

ておぼべき大人物は日蓮上人なりと斷論し上人は日本史上の活ける大人格にして吾人は斯かる英姿高風に接し近づくと得て始めて始めて修養の正道を歩むのであつて有も志あるものは日蓮主義に來るべしとて二時間半に亘り一杯の水だも飲まず息をつくまらぬ程に懇切の辯を振ひ本多大前正は「現代と日蓮主義」に就て現代病弊の思想を匡救するものは現實と理想とを融合し個人と國家との關係を調節したる日蓮主義に依るべきを論明し特に教條日經上人眞筆の新稿抄を拜讀して日蓮主義の活ける信仰を宜べ唯かに無業の靈光を興ふるものがあつた。

△本土曜日午後二時より開演の講談會は本多大前正の題目抄講義あり聴講者頗る増加し特に海軍々人多く極めて眞面目に研鑽の歩を進めつゝあり幸に健全なる發達を望む

六月十二日午後二時より正法護持會の講演を妙國寺に開演す本多大前正は慈父の愛子に於けるが如く時弊に對する救済策に就て懇篤なる教訓を垂れられたり

六月十五日午後二時より妙蓮寺に於て交親會連日會聯合の演説會あり石川師は「兒童と宗教に就て」並川師は「陀羅尼の意義に就て」今成師は「衛生と傳教に就て」各講師が熱烈なる論議を得たりと何れも満足せり加ふに區田旭世女史が雄辯なる聲調もて筑前琵琶「大高源吾」の演奏は精神修養に一段の感興を興へたり

六月二十七日午後一時より經王會の講演を本光寺に於て開演す石川師は「迷信打破に就て」今成師は「佛敎の精華に就て」山根師は「聖訓の權威に就て」詳々開解を興へられ聴衆求道の欲望を達したりとて何れも悦び合へり

此會の運序盛況を呈せるは爲法慶實の至りにこそ六月十日其第八次回講演を淺草慶應寺に開きしが聴衆無慮八十餘名午後一時大衆を率ひて會長山根日東師の嚴肅なる法要修了後午後二時會長の開會宣言に次で右教師朝倉俊達師の「アイエ種族觀察の感想」と題する講演あり何がさて東北諸縣及北海道の巡教を奉へて此日前歸京ありし能仁監督右教師の一行疲勞もやと思ひしに護法の美氣當るべくもあらす表題の「アイエ種族」の過去現在に於ける調査及び將來の豫想等所論極めて緻密に而も該種族の美點及缺點を残り極く指摘し特に宗教思想に論及して耶教徒の熱心なる指導により庶物崇拝より急轉して唯一神敎になりつゝある現状を詳論せられ他山の石我玉を琢くべく警告を興へて降壇次に五島子爵は「信仰と活動」の題下に教へて能まざる譯々の訓導者皆喜悅の表情著しき者あり最後に「國民の宗教的訓練」の題下に登壇したる能仁監督右教師は縱橫現代國民の病弊を普へて精神訓練の必要に論及し更に一轉して日蓮主義訓練の益高き確なる意義を痛論し巧妙なる譬喩深奥なる論斷此日始めての聴衆によつて感興と合點せしめ拍手の響き鳴

會見知

六月二十七日午後一時より經王會の講演を本光寺に於て開演す石川師は「迷信打破に就て」今成師は「佛敎の精華に就て」山根師は「聖訓の權威に就て」詳々開解を興へられ聴衆求道の欲望を達したりとて何れも悦び合へり

信教川品

六月十二日午後二時より正法護持會の講演を妙國寺に開演す本多大前正は慈父の愛子に於けるが如く時弊に對する救済策に就て懇篤なる教訓を垂れられたり

六月十五日午後二時より妙蓮寺に於て交親會連日會聯合の演説會あり石川師は「兒童と宗教に就て」並川師は「陀羅尼の意義に就て」今成師は「衛生と傳教に就て」各講師が熱烈なる論議を得たりと何れも満足せり加ふに區田旭世女史が雄辯なる聲調もて筑前琵琶「大高源吾」の演奏は精神修養に一段の感興を興へたり

會善親

天の聖賢は嗚りし止まざりき新く午後五時孝出度閉會を告げたり

六月二十日午後一時より淺草吉野町町堂寺に催すこの會を起してよりこゝに一週年を遡るに至り紀念講演會の事と聽衆も例會に倍し自づから求道の熱誠溢れ出づるものあるを見うけぬ定期給本會會長導師として法要を行ふて講演を開く予五島盛光君は「信仰と處世法」と題し人々が世に處するに慰安と安立との立脚を第かすんば暗黒裡を迫るに同じく故に宗教信仰に活きて平安と満足に充ちて生涯を送るべしとて詳々之を説くこと懇切丁寧を極む本多大前正は「信仰の持續」に就て日蓮主義信仰の熱火に油を灑ぎ永久不滅の生活に入りて萬代亡びざることに心懸けべしと懇示せらる聴衆何れも歡喜の色表はれ難有き涙に咽ぶものさへあるを見うけけり

教布日録

を有する國家は日蓮主義の普及によりて發展すべき所以を詳細に論明せらる前正が經妙にして莊重なる練然の廣長舌を振ふて一々適切なる譬喩を引き懇説せられたれば聴衆は無量調化をうけたるを疑はず新く午後五時三十分遣文を拜讀して散會を告げたり

いよまで山の手方面は布教の方法を設けないため何となく講究せればならぬと考へて居つた矢先小石川白山の警報寺にて宗義義應師が町内の録日商人と相約して毎月數回演説會を開くこととなつた之は誠に喜ぶべきことで殊に商人との交渉が頗る面白く其第一回は六月三日午後七時より開いたが本堂より門前に至る二十餘間は數十個の燈の光りが輝いて何となし景氣を添へて居る聴衆は百餘名に達したので妙國の功徳を積んだ善男女は多かつたことである

會明國

六月十二日午後二時本會は北海道運教の歸途滄涼中なりし能仁師正一行を聘し講演會を開催せり定期に至るや朝倉右教師は北海道の風俗習慣より驚き起して信仰問題に入り醒真の美風を賞して移住民の信仰心の存在に及び充足完備なる法華經主義に依つて教導の實を擧げたしとの希望を述べ能仁師は日蓮主義は現實主義にして理想主義なり現實主義なるが故に國家を愛し家庭を尊び個人を救ひ夫婦兄弟朋友間の情義の調節技倆を計るものなれば我帝國の如き特殊の淵源

會學行木術

一 開會の辭 幹事 高田久次
一 宗教奏樂 本會附屬少女會員合唱
一 聖訓拜讀(行學の二道を勵むべし) 會員 鹽山龍作
一 聖訓拜讀(たゞ世間の留雅來ると云々) 幹事 服部新五郎
一同上講話 講師 能仁師正

報教森青

牛歳の同風雪に閉ち込られし青森の地も等しく暮日の春光に浴し櫻桃李一時に咲き亂れ真に百花爛漫の好時節能仁師正の北海道軍隊布教として當地を通過せらるるあり曾て笹川教師より通報もありしことと五月三十一日青森大林區署樓上に於て一席の講演を乞ひ茲にも一乘妙法の華開きたり此日師正には縣南八戸を出發せられ午前十一時青森に着せらるるや暫時休養の暇もありばこそ午後一時西尊藏君の先導にて來署あり時辰二時を報すや二百有餘名本署樓上會議室に參集す中村謙藏君開會を宣し殊に本署長永田閣下には修養のため吾曹の企を贊助し此貴重なる執務時間を割愛せられたるを感謝すと述べ併て能仁師正紹介するや師正には修養に於ける偉人の研究と題し約三時間に亘る演

七月二十日午後七時於淺草北清島町統一閣開會
 七月二十一日午後七時於神田橋畔和強樂堂開會
 七月二十二日午後七時於日本橋詰々常磐木俱樂部開會

日蓮主義大講演會

辯士

日宗新報記者 清田 水藤 文歸 堀
 統一記者 山根 義一 東一
 大獅子吼記者 谷上 名 末 君君君
 布教記者 富田 泰岳 明君
 活宗教記者 安孫子 榮明 君君
 法の響記者 富嶺 隆君
 妙教記者 水村 道祥君
 村雲婦人記者 中山 清安君
 めぐみ記者 外山 英倉君
 師子吼記者 松野 日登君

主催

在京 聖祖門下雜誌社

統一

第貳百拾號

天地の聲	日蓮上人の宗教	現代と佛教	權威なき國民道德	法衣を着けたる文明思想家	日蓮主義の一斑	蘇生せしむべき現代	御製拜讀の感	國民教育及宗教に就て	日蓮主義者の態度	現代と日蓮	日蓮主義と家庭	日蓮主義と文明思潮	八風に就て	聖日蓮の風格	舶來の提婆と和製の榮特
妙教記者	獅子吼記者	大獅子吼記者	村雲婦人記者	日宗新報記者	統一記者	活宗教記者	文學博士	海軍大佐	日宗新報記者	統一記者	めぐみ記者	法の響記者	布教記者	統一記者	村雲婦人記者
水村 遵祥	松野 日量	吉永 千草	中山 法城	加藤 文雄	井村 日威	神代 智明	姉崎 正治	佐藤鐵太郎	清水 歸一	山根 日東	新甫 寬實	石田 顯隆	宮田 泰岳	三上 義徹	兒島 宏遠



昭和三十年七月二十四日第三種郵便物認可(毎月一冊)

(東京 三協印刷株式會社印刷)